

事例を読む

カメのあとについて行く

佐治由美子

●カメのチュウ、そしてカメのカシオペア

お茶の水女子大学附属幼稚園のカメの失踪事件のことは、私が同じ敷地内の大学にいるためか、まさに風の便りのように耳に入ってきました。しばらくしてカメが見つかったことも伝わりホッとしたのでしたが、私が事件の詳細を知るに至ったのは、その年度末に発行された附属幼稚園の「研究紀要」^{註1}を手にした時でした。

カメのチュウの事例には一連の事件の顛末^{クマツ}が語られているのですが、その事件に巻き込まれた先生の

ドキドキハラハラはひとまず脇に置くとしても、事件の全貌から伝わる子どもたちの生き生きとした姿は、読む者を引き込まずにはいないような魅力に満ちていました。

私はこの事例を一読した時に、幼稚園から逃げ出したカメのチュウの姿に、かつて読んだ物語『モモ』^{註2}に登場するカメのカシオペアの姿が重なって見えてきました。はて、どういうことでしょう。立ち止まって考えてはみたものの、その幻は日々の流れの中にかき消えてしまいそうでした。

ところが、このたび、この事例に向きあう機会が与えられ、『モモ』の物語を再読する恵みにあずかりました。

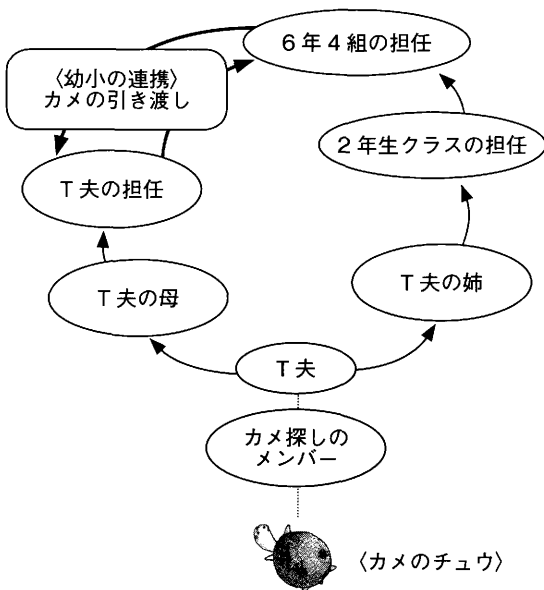
この作品の中には、繰り返し私の目に留まる一つの言葉があることに気づきました。それは「ついでに行く」という訳語です。ドイツ語では少しづつ表現が変わるのですが、数えてみると、何と十回以上も登場するのです。モモという名の女の子は、カメの

不思議なほどにゆっくりとした動きに歩調を合わせて進んでいく、ただそれだけで、人間が人間らしく生きるために必要な「時間」を、灰色の男たちから取り返すことができたのです。

● チュウウの捜索から学ぶ

四歳児の子どもたちは、初めのうちは保育室の水槽を取り囲んでカメを見ていたのですが、園庭にタライを置きその中にカメが放たれると、「カメの動きに誘われるように、一人また一人と園庭に出て」行きました。子どもたちは、まるでカメになったように、「のびのび気持ち良さそうに」それぞれの遊びを始めていったのでしょう。そんな時です。チュウは逃げ出しました。数日後子どもたちの中に、チュウ探しの一団が結成され、「おやま」に登る通路が交わる場所に、「仕掛け」と称してエサ場や水場が作られました。そして、地図を書き、失踪のルートをたどる人も現れました。

この子どもたちの動きのイメージを私なりに探ってみると、その子たち自らがカメの動線を生きるこ
とのできる遊びになっていたことが感じられます。
このように、カメの動線を描いた子どもたちにな
らって、私もこの一連の事件の展開を図で表すこと
を試みました（左図参照）。



すると、カメの引き渡しに至るまでに、何段階ものステップがあり、そこには多くの人のかわりがあったことが見えてきました。幼稚園だけを見ても、チウ探しのメンバーを通じて事態を知ったT夫が母親や姉に伝えたことでT夫の担任だけでなく小学校にまで伝わっていく、その流れの中に人と人との確かな、また温かいつながりが感じられます。それは、小学校においても同様で、クラスで一人の生徒の話や丁寧な受け止め、それを教員間で伝え合いながら幼稚園へとつないでいく、まさに生徒を真ん中においた連携の姿勢が感じられます。

図の中に表したように、いわゆる「幼小連携」は、最終段階のカメの引き渡し部分だけを指すのかもしれませんが、この幼小のやりとりをめぐっては、一つひとつのステップが生き生きとつながり、その豊かさがあるようにして生み出されていく、連携の新たな形が見えます。この円環状のつながりの大本に存在するのがカメであったこと、つまり、この

自然界を象徴するような存在に対する子どもたちの思いが、さらに言うなら、自らの生を悠然と営んでいくカメそのものが、幼稚園と小学校の垣根を越えて両者を「つなぐ」働きをしていたということでもあるのでしょうか。

ここで大事なことは、幼稚園と保護者の連携にしても、幼稚園と小学校の連携にしても、子どもが真ん中においてそこに随行注3しつつ子どもを支えていく大人たちの姿があるということなのではないでしょうか。子どもの育ちゆく力に信頼して歩みを共にしていく大人たちの存在は、子どもの生きる力が育まれる環境として欠かせないものといえましょう。幼稚園教育要領や小学校指導要領に掲げられているような、学びの機会として与えられる連携ではなく、それぞれの文化を背景とした生活の中から生み出される連携が、ここに創出していたように思われます。『モモ』の主人公である浮浪児モモは、カメのあとについて行く中で、一人ひとりの人間が心のうちに

もっている時間なるものの意味について学んでいき
ました。作者のエンデが「ついでに行く」という語を
多用しつつモモのそのような学びを描いたところ
に、私は作者の意図を感じずにはいられません。そ
れは、子どもに随行しつつ、つまり、子どもそのも
のを見つめることによって人間の生の諸相について
研究していく保育学のあり方と重なるように思われ
るからです。モモがカシオペアについて行ったよ
うに、また、幼稚園の子どもたちがチュウについて
行ったように、大人も子どもの姿そのものから人間
について学びつつ、子どもの教育に携わっていく者
でありたいと思います。

(お茶の水女子大学)

注

1 お茶の水女子大学附属幼稚園では、平成20年度より
『環境に対する豊かな感受性を育む』を主題として
研究に取り組み、平成20年度・21年度と続けて研究

紀要を発行している。

2 M・エンデ『モモ』岩波書店 一九七八年

(原著は Ende, M. *Momo* K.Thienemanns Verlag
Stuttgart, 1973)

3 ドゥルーズとガタリは、「随行」の概念を一つの科学
的手続きとして提示し、「王道科学」に対して「移動的・
巡行的科学」という名で新たな科学の定義を行った。
(G・ドゥルーズ／F・ガタリ『千のプラトー』原著：
一九八〇年 邦訳：河出書房新社 一九九四年)

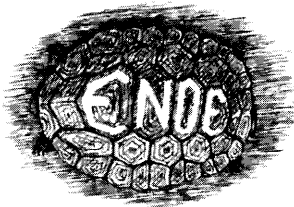


Illustration by Michael Ende
out of: Michael Ende, *Momo*
©1973 by Thienemann Publishing
House (Thienemann Verlag GmbH),
Stuttgart - Wien.